

【特別招待講演】 フランスにおける外来種ミシシピアカミミガメの侵入の現状

アカミミガメを宿主として侵入した外来寄生虫の存在

ローラン・エリティエ (Laurent Héritier)

このたび、須磨海浜水族園らが主催する第5回淡水ガメ情報交換会の特別講演者として招待され、私の研究テーマであるアカミミガメの侵入がヨーロッパの在来の淡水ガメに及ぼす影響について、主にアカミミガメを宿主として侵入した寄生虫の観点から講演を行った。ここでは、私のフランスでの研究について紹介するとともに、アカミミガメを宿主として侵入する外来寄生虫の日本への侵入の可能性について言及したい。

ヨーロッパ・フランスでは、外来種のアカミミガメが広く侵入し、在来のチチュウカイイシガメやヨーロッパヌマガメなどの淡水ガメにさまざまな悪影響を与えている。今回、交換会のさまざまな研究発表を聞き、日本におけるアカミミガメがヨーロッパと同じような状況にあることが確認できた。日本には主にイシガメ、クサガメ、スッポンの3種類の淡水ガメが生息しているとのことだが、日本における淡水ガメ相は変化しており、アカミミガメの個体数が爆発的に増加していること、また日本の在来カメ類がその被害を受けていることが見てとれた。中でも特にイシガメへの影響が強いようだ。須磨海浜水族園の研究者らに案内してもらい、神戸近辺の研究エリアに足を運んだが、観察できたのはアカミミガメのみであった。アカミミガメの侵入の深刻さを知った。加えて、大量のアカミミガメの産卵巣も発見した。アカミミガメにとって日本の温和な気候は繁殖に適しており、増殖しやすいようだ。大量のアカミミガメの幼体が野外で確認されていることがその証拠である。このようなアカミミガメの侵入の現状は、私が住むフランスにおいても全く同じ状況で、外来種からの影響を受ける在来の淡水ガメの保護は必要不可欠であるといえる。ただヨーロッパではアカミミガメの在来カメへの影響に関する生態的研究が活発に行われてきたため、1997年にアカミミガメの輸入が全面禁止となっている。その分、日本のアカミミガメ現状はヨーロッパより深刻かもしれない。

私は、カメに寄生する寄生虫及びアカミミガメを介しフランスに侵入した外来寄生虫が在来カメに与える影響について研究している。フランスに生息する在来のヨーロッパヌマガメおよびチチュウカイイシガメを対象に調査を実施したところ、アカミミガメに寄生している外来寄生虫がヨーロッパの在来の淡水ガメにも寄生していたことを確認した。また、アカミミガメが侵入している地域としていない地域での寄生虫の有無を調べたところ、前者では外来の寄生虫が確認され、後者では在来の寄生虫が確認されたため、アカミミガメの侵入により在来カメに寄生する寄生虫が外来寄生虫に置き換わったものと考えられた。これら寄生虫はカメの目、口腔、膀胱に寄生することが確認されており、寄生虫の置き換わりがカメの健康状態等に悪影響を及ぼすと考えられる。このようにアカミミガメを介して外来の寄生虫が侵入し、私たちの知らない間に在来種に悪影響を与えているのである。

また、日本のカメにも同様に、アカミミガメを介した寄生虫が付着しているかどうかを確かめる為、アカミミガメ収容施設である亀楽園のアカミミガメを用いて実験を行った。この実験に用いるアカミミガメは、野外から捕獲された後、亀楽園で飼育していたものである。解剖の結果、3個体のうち2個体から寄生虫が確認された。その寄生虫はフランス同様おそらくアカミミガメを宿主としてアメリカからやってきたものと考えられる。今回、日本の野外で捕獲されたカメが寄生されていたことから、日本の在来種も同様に、アカミミガメを介した寄生虫に高確率で寄生されていると考えられる。今後、これについて検証し、さらには日本の在来の淡水ガメがその寄生虫からなんらかの影響を受けているのか調査してみたい。

(フランス語翻訳：玉城綾乃，監修：谷口真理)